



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがいに関する基礎的研究
Author(s)	中井, 夏子;岩田, 美智子;門間, 正子;中村, 美穂
Citation	札幌保健科学雑誌,第 3 号:43-49
Issue Date	2014 年 3 月
DOI	10.15114/sjhs.3.43
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6074
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X343.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

研究報告

独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがいに関する基礎的研究

中井夏子¹⁾、岩田美智子²⁾、門間正子¹⁾、中村美穂³⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 岐阜大学医学部看護学科

³⁾ りんくう総合医療センター大阪府泉州救命救急センター

本研究の目的は、救急看護師の職務継続の基礎資料として、独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがいに影響する要素を明らかにすることである。当施設に勤務する救急看護師190人を対象に質問紙調査を行った。「救急看護に対するやりがい」の記述内容を質的記述的研究法を用いて分析した。その結果、救急看護師は、救急医療を必要とする患者の看護ケアを通して患者の救命および回復の兆しを確認することや、自身の役割発揮や知識の獲得などの体験を通してやりがいを実感していた。一方、患者の状態が回復しないときや対応に困難を感じるとき、自身の専門性の発揮ができないと感じるときなどにはやりがいを失っていた。以上より、救急看護師がやりがいを獲得できるような職場環境の構築や看護師個々の専門性が発揮できるようなキャリア支援方法の検討が必要であることが示唆された。

キーワード：救急看護師、やりがい、独立型救命救急センター

Fundamental Research on Job Satisfaction of Nurses Working in Free-standing Emergency and Critical Care Centers

Natsuko NAKAI¹⁾, Michiko IWATA²⁾, Masako MOMMA¹⁾, Miho NAKAMURA³⁾

¹⁾ Nursing Department, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Gifu University School of Medicine Nursing Course

³⁾ Senshu Trauma And Critical Care Center

The purpose of this study was to investigate the job satisfaction of nurses working in free-standing emergency and critical care centers, as part of a wider goal of obtaining fundamental data for developing strategies to encourage retention of nurses engaged in emergency care. 190 nurses were asked to answer questions on a questionnaire and the replies relating to job satisfaction from emergency nursing were analyzed with a qualitative/descriptive approach. The respondents felt their job rewarding when the patient's life was saved or his/her recovery was confirmed whilst they were providing necessary nursing care; when they were able to demonstrate the skills as an emergency nurse; or when they acquired new knowledge. On the other hand, they lost job satisfaction when the patient would not make any recovery or progress; when they felt it virtually impossible to deal with the patient; or when they felt they were not given an opportunity to demonstrate their specialist skills. The findings indicated the importance of discussing how to create a good working environment to keep job satisfaction high, as well as a career support system instrumental in providing opportunities for nurses to demonstrate their individual expert skills.

Key words : Emergency nurses, Job satisfaction, Free-standing emergency and critical care centers

Sapporo J. Health Sci. 3:43-49(2014)

I. はじめに

今日の医療の高度化とそれに伴うシステムの複雑化により医療現場で働く専門職業人はより一層ストレスフルな状態に置かれていることが予測される。なかでも看護師はその最たる職種の一つである。

救急医療に携わる看護師（以下、救急看護師）は、緊急時の状況把握と判断力やチーム医療の調整など広範囲な役割が求められることや患者の死により達成感、自己実現感が得られにくいことが知られている^{1) 2)}。さらに、職務上の特徴から衝撃的な出来事を体験することも多く心的外傷により職務継続が困難となることが報告されている³⁾。そのような状態のなかで、救急看護師の専門性や経験知の蓄積が求められているが、前述したようなストレスや心的外傷により離職する看護師が多く、救急看護の専門性の構築や質の確保が難しいのが現状である。

一方で、救急看護師はストレスフルな環境下でもその仕事に魅力を感じており、個々にやりがいを持ち仕事に励んでいることも報告されている⁴⁾。職務を遂行する際にやりがいのようなポジティブな感情をもつことは、内発的な動機づけとなることや、仕事にやりがいを感じている者ほど職務満足度が高いことが報告されている⁵⁾。看護師を対象としたやりがいに関する研究^{6) 7) 8)}は多数報告されているが、救急看護師に焦点を当てた研究は希少であり、その目的のほとんどが仕事のやりがいを促進あるいは阻害する要因を明らかにしようとしたものである⁹⁾。そのため、救急看護師のやりがいそのものを十分に捉えているとはいえない。

そこで、本研究では救急看護師の職務継続の基礎資料を得るために、救急看護師のやりがいに影響する要素を明らかにすることを目的とした。対象は研究者らが調査した研究¹⁰⁾を基に労働意欲があると報告されている独立型救命救急センターの看護師とし、職務継続の視点から「救急看護へのやりがいを感じるとき」と離職の要因を探索するために「救急看護へのやりがいを失うとき」について記述内容から考察した。

II. 研究目的

本研究の目的は、独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがいに影響する要素を明らかにすることである。

III. 用語の定義

1. 救急看護師：高橋ら¹¹⁾の定義に準じて、本研究では救急看護師を「全次または三次救急医療施設で働く看護師で、救急医療を必要とする患者に対してプレホスピタルケア、初療外来ケア、集中治療ケア、緊急手術および後方病棟ケアを行う看護師」と定義する。

2. やりがい：広辞苑¹²⁾では遣り甲斐を「するだけの値打ち」と定義している。福岡⁶⁾は、やりがいを「仕事を達成していく過程で感じる喜びや心のはりあい、手ごたえ」と定義している。また、西川¹³⁾はやりがいを「ある行為の結果として起こってくる満足感に似た感情、ある行為をすれば、その結果として得られる何らかの報酬または満足感」と定義している。以上のことから本研究では、「救急看護師が救急現場において仕事を達成していく過程で喜びや心のはりあい、手ごたえ、満足を感じる」と定義する。

IV. 研究方法

1. 対象施設および対象者

日本救急医学会のホームページに掲載されている「全国救命救急センター一覧」と病院のホームページを参考とし抽出した全国の独立型救命救急センター4施設に勤務する看護師190人。

2. 対象施設および対象者の選定理由

研究者ら¹⁰⁾は救急看護師を対象とし看護師の離職原因の一つである蓄積的疲労について調査を行った。その結果、独立型救命救急センターに勤務する看護師は、蓄積的疲労のなかでも社会的側面の疲労である「労働意欲の低下」が低値であることが明らかとなった。「労働意欲の低下」とは、自分の生活や職場についての評価が含まれており、職場の雰囲気や職場への不満などを反映する特性である。独立型救命救急センターに勤務する看護師の社会的側面の疲労が低値であったことは、自ら救急看護を志向して就職し、その職務を全うしているためではないかと考えた。そのため、本研究において救急看護師のやりがいに影響する要素を明らかにするためには、救急看護へのやりがいを持ち働き続けている看護師を調査することが適切と考え、独立型救命救急センターに勤務する看護師を対象とすることとした。

3. 調査方法

調査は郵送法による自記式質問紙調査を行った。対象施設の看護管理責任者に文書を用いて研究の目的・趣旨を説明し同意の得られた施設に質問紙を郵送した。質問紙の配布は当該施設救命救急センターの看護管理者に依頼し、回収は同封した返信用封筒を用いて個人より返送するよう依頼した。

調査項目は、(1)基本的属性、(2)救急看護に対するやりがい、で構成した。(2)救急看護に対するやりがいは、ここ最近、救急看護に携わることにやりがいを感じているかという問いに「やりがいを感じている」または「やりがいを感じていない」の2択で回答を求め、「やりがいを感じている」と回答したものには「どんなときにやりがいを感じるか」、「やりがいを感じていない」と回答したものには「どんなときにやりがいを失うのか」それぞれ自由記述を求めた。

4. 分析方法

(1)基本的属性および(2)救急看護へのやりがいの有無につ

いては記述統計を行った。自由記述で得られた記載内容は質的記述的研究法を用いて、記載文章を意味により文節に分け意味を損なわないようにコード化し、類似内容でグループ化し命名するといった抽象化を繰り返し、サブカテゴリおよびカテゴリを抽出した。分析は共同研究者間で話し合いを重ねながら進め、信頼性、妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査にあたり対象施設および対象者に文書で研究目的、研究参加の自由意思、匿名性と守秘義務の遵守、データの管理方法、廃棄方法、質問紙の回答をもって同意が得られるものとする、結果の公表方法等を説明した。また、本研究は札幌医科大学倫理審査委員会の承認を得て行った。

Ⅴ. 結 果

1. 対象者の概要

同意の得られた4施設に勤務する看護師56人より回答が得られ（回収率29.5%）、すべて有効回答であった（有効回答率100.0%）。対象者の性別は男性11人（19.6%）、女性45人（80.4%）、平均年齢は32.3±6.7歳、看護師の平均経験年数は10.4±5.9年、救急看護に携わった平均経験年数は6.5±5.5年であった。

2. 救急看護へのやりがい

対象者56人のうち、救急看護にやりがいを感じている者は30人（53.6%）、やりがいを感じていない者は26人（46.4%）であった。「どんなときにやりがいを感じるか」という問いに対し記述内容を分析した結果、表1のように5カテゴリと16サブカテゴリが抽出された。「どんなときに

やりがいを失うのか」という問いに対し記述内容を分析した結果、表2のように6カテゴリと19サブカテゴリが抽出された。以下カテゴリごとに結果を述べる。なお、【 】はカテゴリ、< >はサブカテゴリ、「 」はコードを示す。

1) やりがいを感じる時

(1) 【重症患者を救命したとき】

このカテゴリは<重症患者を救命できたとき>、<患者が救命されたとき>、<患者が超急性期を超え病態が好転したとき>の3つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救急医療において重症患者の救命にやりがいを感じていた。

(2) 【危機的状況に置かれた患者が回復過程を辿り意思疎通がとれるようになったとき】

このカテゴリは「重症患者が回復しモニターやルート類が減っていき、意識レベルが上昇したとき」という<患者が回復過程を辿り意識レベルが上昇したとき>、<患者が意思疎通を図れるようになったとき>、<重症患者のケアを行い回復したとき>、<危機的状態におかれた患者と家族の関わりをおこなうとき>の4つのサブカテゴリから構成された。救急看護師が危機的状況にある患者の回復を支援し、患者との意思疎通を通してやりがいを感じていることが伺えた。

(3) 【生命危機に陥った患者が社会復帰した姿をみたとき】

このカテゴリは<生命危機に陥った患者が元気に回復したとき>、「以前入院した患者が来院したときに元気な姿をみたとき」という<社会復帰した患者の元気な姿をみたとき>の2つのサブカテゴリから構成された。救急医療が必要な段階を超え、社会復帰に至った患者の回復を確認することで救急看護師はやりがいを実感していた。

表1 やりがいを感じる時のカテゴリとサブカテゴリ

サブカテゴリ	カテゴリ
重症患者を救命できたとき	重症患者を救命したとき
患者が救命されたとき	
患者が超急性期を超え病態が好転したとき	
患者が回復過程を辿り意識レベルが上昇したとき	危機的状況に置かれた患者が回復過程を辿り意思疎通がとれるようになったとき
患者が意思疎通を図れるようになったとき	
重症患者のケアを行い回復したとき	
危機的状態に置かれた患者や家族との関わりをおこなうとき	
生命危機に陥った患者が元気に回復したとき	生命危機に陥った患者が社会復帰した姿をみたとき
社会復帰した患者の元気な姿をみたとき	
患者の予後を左右する役割を認識したとき	救急看護における看護師の役割を認識・発揮したとき
看護師独自の役割を認識したとき	
状況判断を行い迅速に対応できたとき	
救急の場をマネジメントできたとき	
新しい知識を獲得したとき	救急看護の知識を獲得しさまざまな体験に触れるとき
勉強できることが多い	
さまざまな経験ができ興味がもてる	

表2 やりがいを失うときのカテゴリとサブカテゴリ

サブカテゴリ	カテゴリ
患者の状態が軽快しないとき	患者の状態が軽快しないとき
精神科疾患患者の対応に困難を感じる時	患者の看護に倫理的課題や困難を感じる時
生体への評価が中心となり患者への倫理的配慮が十分ではないと感じるとき	
救急看護のみならず多用な看護が必要とされるとき	
様々な役割があり自分自身が集中して働く環境にないとき	自分の志向する専門的な救急看護ができないとき
自分のやりたいことができないとき	
救急外来で患者搬入の担当とならないとき	
人員不足で専門的な看護ができていないとき	救急看護に達成感を感じないとき
達成感を感じないとき	
救急看護に対する熱意が冷めてきたと感じるとき	
目標を見失っているとき	救急医療に疑問を感じる時
自分の知識や能力のなさを感じる時	
受傷起点によって救命したことに疑問をもつとき	
救急で行われている処置や治療に疑問を感じる時	職場環境が身体的、精神的に耐え難いと感じるとき
3次救急の患者背景が変化していると感じるとき	
入院患者が限られていると感じるとき	
勤務体制により体力的にきつと感じるとき	職場環境が身体的、精神的に耐え難いと感じるとき
多忙であり精神的にきつと感じるとき	
マンパワーが不足しているとき	

(4) 【救急看護における看護師の役割を認識・発揮したとき】

このカテゴリは「急性期の関わりで患者の予後が左右されると感じるから」というく患者の予後を左右する役割を認識したとき>、<看護師独自の役割を認識したとき>、<状況判断を行い迅速に対応できたとき>、<救急の場をマネジメントできたとき>の4つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は患者の予後に関わる自らの役割を認識しながら、患者の置かれた状況を判断し、かつ救急の場をマネジメントすることにやりがいを感じていた。

(5) 【救急看護の知識を獲得しさまざまな経験に触れるとき】

このカテゴリは<新しい知識を獲得したとき>、<勉強できることが多い>、<さまざまな経験ができ興味をもてる>という3つのカテゴリから構成された。救急看護師は救急看護の学習を通して知識を蓄積し、経験を重ねる機会を得ることにより救急看護への動機づけがなされていた。

2) やりがいを失うとき

(1) 【患者の状態が軽快しないとき】

このカテゴリは<患者の状態が軽快しないとき>の1つのサブカテゴリから構成された。救急看護師はケアをおこなっても患者の状態が軽快しないときにやりがいを失っていた。

(2) 【患者の看護に倫理的課題や困難を感じる時】

このカテゴリは<精神科疾患患者の対応に困難を感じる時>、<生体への評価が中心となり患者への倫理的配慮

が十分ではないと感じるとき>の2つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は患者へのケアに困難を感じ、また、自らのケアを振り返り倫理的配慮が十分ではなかったと反省し課題を抱えていた。

(3) 【自分の志向する専門的な救急看護ができないとき】

このカテゴリは<救急看護のみならず多用な看護が必要とされるとき>や「日々指導ばかりで実際に自分自身が働くことに集中できる環境ではないから」というく様々な役割があり自分自身が集中して働く環境にないとき>、<自分のやりたいことができないとき>、「救急外来におりる回数や患者が来るときに当たらないことがあるから」というく救急外来で患者搬入の担当とならないとき>、<人員不足で専門的な看護ができていないとき>の5つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は自らが描き志向する看護を、多忙さやケア以外の役割、人員など職場環境の要因によりできないと感じるときにやりがいを失っていた。

(4) 【救急看護に達成感を感じないとき】

このカテゴリは<達成感を感じないとき>、<救急看護に対する熱意が冷めてきたと感じるとき>、<目標を見失っているとき>、<自分の知識や能力のなさを感じる時>の4つのカテゴリから構成された。救急看護への達成感や熱意、目標を失い、自分自身の知識不足や能力のなさを感じ、やりがいを失っていた。

(5) 【救急医療に疑問を感じる時】

このカテゴリは「自殺などの受傷起点などによって左右されますが、助けたことによって良かったと思えるのかと

考えてしまう」という＜受傷起点によって救命したこと
疑問をもつとき＞、＜救急で行われている処置や治療に
疑問をもつとき＞、＜3次救急の患者背景が変化していると
感じるとき＞、＜入院患者が限られていると感じるとき＞
の4つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救
急医療を受ける患者の背景や病院の体制に伴う入院患者の
制限などに疑問を抱いていた。

(6)【職場環境が身体的、精神的に耐え難いと感じるとき】

このカテゴリは＜勤務体制により体力的にきついと感じ
るとき＞、「忙しいあまりに精神的にきつい時がある」と
いう＜多忙であり精神的にきついと感じるとき＞、＜マン
パワーが不足しているとき＞の3つのカテゴリから構成さ
れた。勤務体制や救急医療などに関わる背景から心身共に
疲弊しやりがいを失っていた。

VI. 考 察

以上の分析結果から、独立型救命救急センターに勤務す
る看護師のやりがいを感じる時、やりがいを失うときの
様相について考察を行い、やりがいに影響する要素を明ら
かにすることを試みる。

1. 独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがい を感じる時の様相

救急看護師は、【重症患者を救命したとき】、【危機的状
況に置かれた患者が回復過程を辿り意思疎通がとれるよう
になったとき】、【生命危機に陥った患者が社会復帰した姿
をみたとき】のように救急医療を必要とする患者の看護ケ
アを通して、患者の回復の軌跡を確認しやりがいを感じて
いた。小野ら⁴⁾は、救急看護師は患者の回復した姿を
みて看護することの喜びを感じていると報告している。ま
た、林ら¹⁴⁾は急性期病院の看護師を対象とし働きがいにつ
いて調査したところ、もっとも働きがいを感じる時は患
者・家族からの直接的な反応や患者の回復であると報告し
ており、本研究でも同様の結果が得られたと考える。

救急看護師にとって、【救急看護における看護師の役割
を認識・発揮したとき】のように自らの役割を認識し発揮
することはやりがいの実感に繋がっていた。役割とは、個
人の受け取り方や取り巻く環境の影響などにより、肯定的
な感情にもなれば否定的な感情にもつながる。救急看護師
は、日々、生命の危機的状況にある患者への高度な知識、
迅速な判断、熟練した技術が要求されるが、このようなな
かでも自らの役割を認識し発揮できるような場と関わり、
更には役割を発揮していることを認識できる機会が必要で
あると考える。

救急看護師は患者の看護ケアや自らの役割実践を通して
【救急看護の知識を獲得しさまざまな経験に触れる】こと
を体験していた。仕事意欲について調査した研究¹⁵⁾では、
どの年代においても看護ケアのあり方や新しい知識、技術
は仕事意欲と関連していたと報告されており、救急看護に

においても看護師が知識の獲得や体験を通してやりがいを感じ
ていることが明らかとなった。

2. 独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがい を失うときの様相

救急看護師が救急看護においてやりがいを失うときは、
【患者の状態が軽快しないとき】、【患者の看護に倫理的課
題や困難を感じる時】のように、患者の状態が回復しな
いときや救急看護への課題や困難を感じる時であった。
グレッグラ¹⁶⁾は、患者からの肯定的なフィードバックや患
者の回復が看護実践に対する充足感につながると述べてお
り、本研究においても看護師にとって患者の回復如何が救
急看護のやりがいに影響していることが示唆された。また、
救急看護師は、多様な病態を呈する患者の看護に課題や困
難を感じていた。＜生体への評価が中心となり患者への倫
理的配慮が十分ではないと感じるとき＞に示されるように、
救急看護師は自分の行った看護や臨床判断が正しいかどう
かについて問い直しを行っていた。これは、倫理的感受性
を高め倫理的問題の明確化に繋がる¹⁷⁾ため、看護師個々の
体験を言語化し倫理的課題に介在する機会を設けていく必
要があると考えられる。また、精神科疾患患者で救急医療を必
要とするのは自殺企図患者である場合が多く、＜精神科疾
患患者の対応に困難感を生じる＞と示されていた。救急看
護師は自殺企図患者の看護に対して苦手意識を持っている
という報告¹⁸⁾や自殺企図患者はスタッフに死の恐怖と直面
させ、非常に強い不安を喚起させるという報告¹⁹⁾と同様に、
本研究の対象者も精神科疾患患者の看護に困難を感じてい
ることが示唆された。特に、独立型救命救急センターの特
徴として精神科医が在籍していないことも一因であると思
えられ、こうした事例に対応できるよう、精神科疾患患者
への対応についてカンファレンスや事例検討などの開催、
自施設のみならず他施設の精神科医やリエゾンナースにコ
ンサルテーションできる体制の整備が必要であると考えら
れる。

救急看護師にとって、【自分の志向する専門的な救急看
護ができないとき】のように、自らの目指す看護と現実の
間にずれを感じ専門性の追求ができないときにはジレンマ
を感じていることが示唆された。本研究の対象者は年齢や
看護師経験年数からキャリア中期に該当する看護師が多い
ことが推察される。この時期は患者中心の看護を洗練し救
急看護の専門性を育む時期でもあり²⁰⁾、対象者個々のキャ
リアデザインを明確化し専門性が発揮できるよう支援する
ことが必要であると考えられる。坂口ら²¹⁾は、救急看護師
のキャリア志向の特徴を調査した結果、救急看護師の特徴
として「専門的・職能的能力」と「自律性」が抽出されたと
述べている。「専門的・職能的能力」のキャリア志向をも
つ人とは、キャリアが発達するにつれて、特定の種類の仕
事に対する強い才能と高いモチベーションの両方を持って
いる人々を指している。このことから、救急看護師の育成

にはキャリア段階に沿った支援が必要であると考えられる。

また、救急看護師は、＜目標を見失っているとき＞＜自分の知識や能力のなさを感じる時＞などに代表されるように【救急看護に達成感を感じない】というバーンアウトやストレス反応を示す感情を抱いていた。また、【救急医療に疑問を感じる時】や【職場環境が身体的、精神的に耐え難いと感じる時】に示されるように、昨今の救急車の不適正使用や延命処置の是非などを疑問視している看護師の心情が吐露されていた。看護師の心理的ストレスについて救急看護師と内科看護師を比較した研究²²⁾では、救急看護師の心理的ストレスは強く、勤務体制などの管理面の見直しが急務であると述べられている。今回の結果からも、過重労働による疲弊がやりがいの喪失に繋がる可能性が示唆されており労働環境の改善が求められているといえる。看護師のバーンアウトのサポートについて調査した研究²³⁾では、職場のあたたかな雰囲気や話し合えるサポートメンバーの存在、気軽に相談できる部署の設置や人員配置が求められており、救急看護師個々の内在する疑問や感情を語り合える場が求められていると考える。このことから、やりがいの低下をきたす前にキャリアに応じた目標の再設定や教育内容の検討をおこないバーンアウトや離職を未然に予防することが求められていると考える。

以上より、独立型救命救急センターに勤務する看護師は、救急医療を必要とする患者の看護ケアを通して患者を救命し回復の兆しを確認することや自身の役割発揮や知識の獲得などの体験を通してやりがいを実感していた。一方で、患者の状態が回復しないときや対応に困難を感じる時、自身の専門性の発揮ができないと感じるときなどにはやりがいを失っており、やりがいの実感は体験によって表裏一体であることが確認できた。このことから、体験を肯定的に捉えやりがいを獲得できるような職場環境の構築や看護師個々の専門性が発揮できるようなキャリア支援方法の検討が必要であることが示唆された。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究では全国の独立型救命救急センターに勤務する看護師を対象としたが、質問紙の回収率が少なく一般化するには限界がある。また、協力施設の背景については調査していないことから施設の特徴が影響していることは否定できない。更に、独立型救命救急センターに勤務する看護師のやりがいに影響する要素を抽出したが、対象者のなかには救急看護のやりがいそのものを持っていないか問題にしている者がいた可能性は否定できない。今後は対象者数を増やすとともに、救急看護師のやりがいに影響している要素について検討を重ね、救急看護師のやりがいの構造化を目指すことが課題である。

謝 辞

研究にあたりご協力いただいた対象施設の看護部長様、看護師の皆様は心より感謝致します。

引用文献

- 1) 中山由美：救命救急センターに就職した新卒看護師が感じているストレス要因. 藍野学院紀要20：42-51, 2006
- 2) 山勢博彰：救急医療における看護師のストレスの実態. Emergency nursing15(11): 16-22, 2002
- 3) 真木佐知子、笹川真紀子、廣常秀人他：三次救急医療に従事する看護師の外傷性ストレス及び精神健康の実態と関連要因8(2): 43-52, 2007
- 4) 小野さゆり、館野由美、國井正子：救命救急看護師が抱く「良いストレス」の要因. 日本救急看護学会誌10(3): 20-24, 2009
- 5) 亀岡智美、定廣和香子、舟島なをみ：目標達成度と満足度が高い看護婦・士の特性の探索—キング目標達成理論を基盤にして—. 看護教育学研究10(1): 29-42, 2001
- 6) 福岡由紀：N県内における副看護師長のやりがいに関する看護管理的視点からの分析. 日本看護管理学会誌11(1): 49-56, 2007
- 7) 原田雅子：熟練外来看護師のやりがい獲得の過程に潜在する実践知の可視化. 日本看護科学学会誌31(2): 69-78, 2011
- 8) 江口裕美子、湯沢八江：手術室看護師の業務に対する意識の一考察：日本看護研究学会雑誌31(4):101-110, 2008
- 9) 鶴賀圭吾、白田久美子：救命救急医療現場で勤務する看護師のやりがいを促進する要因と阻害する要因. 日本クリティカルケア看護学会誌5(1):157, 2009
- 10) 中井夏子、峯上環、門間正子：独立型救命救急センターに勤務する看護師の蓄積的疲労の実態. 札幌医科大学保健医療学部紀要12:9-15, 2010
- 11) 高橋章子、館山光子、長谷川陽子他：救急看護師に期待される役割と能力に関する研究 その1. 日本救急看護学会雑誌6(2):6-12, 2005
- 12) 新村出：広辞苑 第六版. 東京、財団法人新村出記念財団, 2008, p2847
- 13) 西川一廉：職務満足の心理学研究. 東京、勁草書房. 1984, p160-199
- 14) 林恵美子、中屋舘子、須川真規子他：急性期医療を担う看護師の働きがい. 日本看護学会誌 看護管理37: 475-477, 2005
- 15) 宮崎仁美：若手看護婦と熟練看護婦の仕事意欲の相違.

神奈川県立看護大学学校教育課程研究集録:67-72, 1995

- 16) グレグ美鈴：臨床看護師の組織コミットメントを促す経験，岐阜県立看護大学紀要，6(1):11-18,2006
- 17) 杉田久子：クリティカルケア看護場面における看護師の語り—倫理的ジレンマを中心に，日本赤十字看護大学紀要19:45-56, 2005
- 18) 岩田美智子：独立型救命救急センターにおける自殺企図患者に対する看護師の認識，岐阜看護研究会誌4: 93-103, 2012
- 19) 守村洋：看護師が抱えるジレンマへの備えと答え，エマージェンシー・ケア24(11):17-21, 2011
- 20) 館山光子、高橋章子：救急看護師の役割と能力に関する研究—三次救急医療施設における新卒看護師の能力獲得の特徴—日本救急看護学会雑誌8:58-66, 2007.
- 21) 坂口桃子、花井恵子、三浦睦子：救急部門に働く看護職のキャリア発達に関する実証的研究—キャリア志向に焦点をあてて—，日本臨床救急医学会誌7:240-247, 2004
- 22) 宇田賀津、森岡郁晴：救命救急センターに勤務する看護師の心理的ストレス反応に関連する要因，産業衛生学雑誌53:1-9, 2011
- 23) 三枝香代子、白鳥孝子、浅井美千代他：救急・クリティカルケア看護に携わる看護師のバーンアウト予防のためのサポート方法に関する研究—看護師のバーンアウトの原因とそのサポートに対する認識より—，千葉県立保健医療大学紀要2(1):11-18, 2011